

BATTLE BALLER

HARUKA

III

氷の美少女

5 再会

Ψ

(Eternity Flame)

バトルボーラーはるか

第三集

氷の美少女

第5章

再会

作・ Ψ (Eternity Flame)

午後からは更に県南を目指し、高知に入ると紫陽花(あじさい)を見て回った。途中、小雨がぽつぽつと降り出し、やがて豪雨(ごうう)となると傘を持ってきてなかった一行は、慌てて引き返さざるを得なくなっていた。

「オレの内力(メキド)で雨雲(あまぐも)を吹っ飛ばそうか？」

「むやみに力を使うなって師匠(ししょう)に言われてるでしょ！」

正友(まさとも)の提案をあっさり却下するはるか。そんな話しをしている間も豪雨はその勢いを一向にゆるめず、しばらく待ったが、はるか達一行はこれ以上の駐在を諦め、帰宅を余儀(よぎ)なくされていた。

「半端(はんぱ)な雨じゃないな...」

普段なら太平洋を望む絶景(ぜっけい)を眺望(ちょうぼう)できる、県南の山道。しかし、ワイパーで除去(じょきょ)できる限度を超(こ)えた雨に、視界がままならぬ状況での車の走行は、大変、危険であった。

山側に面する方では崩落(ほうらく)の危険があったし、海に面した方に突っ込むような事があれば、標高(ひょうこう)何十、何百メートルから一気に転落をしてしまう危険性があった。

滝(たき)のようにフロントガラスを流れる雨を前に、秀樹(ひでき)はとても運転し辛そうで、経験のない事態に焦(あせ)っているようであった。

かつてない規模(きぼ)と勢いで長時間続く豪雨(ごうう)は、次第に太陽光も届かぬ程のぶ厚い雨雲を形成し、周囲を暗く閉ざして行った。

「これはただ事じゃないぞ...」

運転に気を取られた秀樹だが、静かに漏(も)らした言葉は、何かを警戒(けいかい)しているような内容であった。おおよそそれが何なのかは、同乗する全員が薄々は分かっていたが、誰もその事には触(ふ)れずにいた。

触れずにいたというのは、厳密(げんみつ)に言えば触れられるような心境(しんきょう)ではなかったのである。それは、今、置かれた道路状況がとても危険な状況だったのが原因なのは言うまでもなく、事故を恐れ皆して秀樹の運転を見守っていたからであった。

「秀さん、前ッ!!」 呼ぶ正友。

「何だッ!?正友ッ!？」

正友の言葉に秀樹が前を見ると、前方に何かガラスのように光る物体が空からチラッと見えた。慌ててブレーキを踏む秀樹。

ほとんど見通しの利かない状況に徐行(じょこう)に近い運転であったので、おびただしい雨にスリップしながらもすぐに車は止まったが、ガラスのように光る物体は、上空から凄(すき)まじい勢(いきおい)で車へと迫ってきた。

近づくに連れその物体は大きさを増し、巨大な隕石(いんせき)ほどもある事が判(わか)ったので、正友が慌(あわ)てて風を操(あやつ)り迎撃(げいげき)した。

「みんな伏(ふ)せろッ!!」

正友の言葉に全員が従(したが)ったが、身構(みがま)えるはるか達の頭の上で起きた爆発音に、車内は騒然(そうぜん)となった。

「...みんな大丈夫か?...

なんとか危機(きき)を脱(だっ)したのを知り、周りを気づかう秀樹。全員の無事を確認した所で、車の外に出てみると...

「なんじゃこりや!?!...」

車外には氷の破片(はへん)らしき物が散乱(さんらん)していた。驚(おどろ)く正友であったが、さすがに誰がやったかは理解できていた。

「...んにやろ～...随分(ずいぶん)とオシャレなご挨拶(あいさつ)をしてくれるじゃねえか...。」

怒り心頭(しんとう)の正友。秀樹は興奮(こうふん)する正友をひとまずなだめ、後続車両にいる功一と洋一の安全も確認すると、全員に号令をかけた。

「どうやらこの前の“奴等”が俺達に決戦を挑(いど)んでいるようだ。だから今からその呼び出しに応じて、向こうに乗り込む。」

「ドコに?...」 問いかけるはるか。

「今、奴(やつ)らが飛ばしてきた氷の塊(かたまり)らしき物体はドコから来た?」

秀樹は持ち前の分析力(ぶんせきりよく)で、はるかの問いかけに即座(そくざ)にそう応じた。

「!?...空ね！」

「そうだ。奴等は数日前も、内力で作られたらしき氷の島のような所を拠点(きよてん)にし、それを空に浮(う)かべてた。だから奴(やつ)らは間違(まちが)いなく空にいる。あの厚い雨雲(あまぐも)の先を抜ければ分かる事だろう。」

そう言うのと、秀樹はケルビムを召喚(しょうかん)した。はるかとは正友も同じようにし、洋一と功一と沙織をそれぞれに乗り分けさせると、一気に大空へと飛び立った。

雨雲の中に入ると、そこは激(はげ)しい雷雨(らいう)の真っ只中(ただなか)であり、沙織は悲鳴(ひめい)をあげそうになったが、ケルビムの速度は相当(そうとう)に速かったのであつという間に突(つ)っ切れ、何とか心を落ちつかせる事ができていた。

ぶ厚い雨雲を抜けたはるか達。その視界の先には、先日、秀樹と正友が乗り込んだ大きな氷の島が、前に見た時よりも数段規模(きぼ)を増し浮かんでいた。

「!?...この前よりだいぶンデカくなってねえか？秀さん！」

「ああ。“主(あるじ)”がいるからじゃないか？...」

氷の島はまるで一国の領土(りょうど)のように、山河(さんが)を配(はい)していた。鋭(すど)く尖(とが)った冰山(ひょうざん)に囲(かこ)まれた中に堅牢(けんろう)な城が造られていて、この間、見た時とは明らかに島全体の風格が違っていた。

「あの城に詩音ちゃんがいるのかな？...」

はるかがそう言うのと一

「行けば分かるさ。」と、答える秀樹。

次の瞬間(しゅんかん)、はるか達のたむろする上空めがけ無数の矢が飛んできた。

「行くぞ!!」

秀樹のかけ声と共に、三体のケルビムが一斉(いつせい)に天空を翔(か)け出した。矢の雨を搔(か)いくぐり、はるか達は敵の本拠(ほんきょ)らしき城へとケルビムを走らせた。

近づくにつれ、城は猛烈(もうれつ)な吹雪(ふぶき)に覆(おお)われたので、その城を取り囲むように連(つら)なる冰山帯(ひょうざんたい)でケルビムを止めると。保護(ほご)色(しよく)になっていたため判(わか)りにくかったのだが、ビッグフットやスノータイガーが数え切れないほどいるのが確認(かくにん)できた。

「こりやスゲエ数(かず)だな...。」

高低差(こうていさ)を隔(へだ)て睨(にら)み合う両者(りやう)達(たつ)。すると、ビッグフットとスノータイガーの群(む)れの真(ま)ん中に、ぽっかりと大きな穴(あな)が空(く)いた。その穴(あな)に現(あら)れた人影(ひとかげ)。それは氷(こ)の四天王(しやうてん)と自(みずか)ら名乗(な)のる、この前(まへ)の男(おとこ)達(たつ)であつた。

「...やっとお出(い)ましか。」

四天王(しやうてん)達(たつ)の派手(はで)な演出(えんしゆ)と登場(とうじやう)の仕方(しかた)に、半(なか)ば呆(あき)れたようにそう言う秀樹(ひゆき)。

「フハハハッ...よく来(き)たな！」

剣次(けんじ)は声高(こゑたか)にそう言った。

「お前(まへ)らが呼(よ)んだんだろがッ！」

と、声(こゑ)を荒(あら)げる正友(しょうとも)。「詩音(しおん)ちゃん(ちゃん)はドコ(どこ)だ?」と問(と)い詰(つ)めようとしたが、その前(まへ)に本人(ほんじん)が現(あら)れた。

「詩音(しおん)ちゃん!?!」叫(こゑ)ぶ正友(しょうとも)。

その声(こゑ)と同時(どうじ)に、敵(てき)がうじゃうじゃいるにも関(かん)らず、彼(かれ)はその輪(わ)の中(なか)へと飛(と)び込(こ)んで行(い)こうとした。

「止めろッ!!」

すんでの所(ところ)でそれを阻(そ)止(し)した秀樹(ひゆき)。そんな正友(しょうとも)と秀樹(ひゆき)を見(み)ても、詩音(しおん)は眉(まゆ)ひとつ動(うご)かさな(な)いでいた。

「貴様(きさま)ら、詩音(しおん)ちゃん(ちゃん)に何(なに)を(を)した！」

と、凄(すご)みながら剣次(けんじ)に問(と)う正友(しょうとも)。

「我らは先代の王から預(あず)かったメキド(内力)を、詩音様にお返ししただけよ。詩音様は、そこで我らが一族の王として課(か)せられた使命(しめい)をお悟(さと)りになられたのであろう。その使命に比べれば、貴様(きさま)ら人類の命や些細(ささい)な絆(きずな)など虫けら同然(どうぜん)よ。」

「くッ...秀さん、離(はな)せッ!!オレがアイツらブツ飛ばして、詩音ちゃんと話して元に戻す！」

「馬鹿言うな！一体、どれだけの敵がいると思ってるんだ!!そんな無茶(むちゃ)したら、詩音ちゃんに辿(たど)りつく前に返討ち(かえりうち)にされるぞ!!」

秀樹はそう言って、正友の無謀(むぼう)な単独行動(たんどくこうどう)を諫(いさ)めた。

「くッ...。」

頭がカッとなった正友は、何も言えなくなってしまうていた。そんな正友を見て、秀樹が変わって剣次と話した。

「...おい剣次とやら！詩音ちゃんは、お前達の“王”に合意の元でなったのか？」

「そうだ」

「嘘(うそ)だッ!!」

「正友！お前は黙(だま)ってる!!お前達の目的は果たした。なら俺達に何の用だ？」

「ふふふ...聞くまでもあるまい。ソロモン王の秘宝(ひほう)よ！我らが永年の悲願(ひがん)である王国の再来...それがもうすぐ叶(かな)うのだ。フハハハハッ...。」

「お前個人のだろ？」

秀樹の鋭(するど)い指摘(してき)に、剣次は驚(おどろ)きを隠せないでいた。

「貴様！何を根拠(こんきよ)に...!？」

「何を焦(あせ)ってるんだ？お前はずいぶんと手広く商売をやってるが、それは単なる組織の運営とかいうレベルの規模(きぼ)じゃないみたいじゃないか。大昔の思想(しそう)なんか持ち出して、仲間達を自分のいいように使い、それらで得た莫大(ばくだい)な資金で私腹(しふく)を肥(こ)やしてるんだろ？」

「黙(だま)れッ！！」 ムキになる剣次。

その仕草(しぐさ)が、何よりも秀樹の言葉が真実であることを告げているかのようであった。

「これは我らが“王”詩音様のご意志だ！！」

「本当に本人の意思か？」

「当たり前だ!!もはやこれ以上、貴様らと話す事はない！勝負だ!!」

「...やれやれ。まあいい、どう見ても詩音ちゃんは、何者かに操(あやつ)られてるみたいだし。お前らを倒(たお)して、ちゃんと話しをしてみないと...。行くぞ！！」

秀樹と剣次。二人のリーダー格の言葉に対峙(たいじ)する二つの勢力(せいりよく)が、沈黙(ちんもく)を破り一斉(いつせい)に戦闘を始めた。

「秀さん、アレ行くぞ!!」

正友のその言葉だけで秀樹は意味を理解していたようで。

「...いきなり全快(ぜんかい)だな。」

と、時期(じき)尚早(しょうそう)だと言いたいそぶりを見せた。

「天空風切丸(てんくうかぜきりまる)！！」を手に持ち出し、

銀竜を旋回(せんかい)させると、凄まじい暴風(ぼうふう)が沸(わ)き起こった。その余波(よは)は氷の一族の手下共の動きを止めてしまう程(ほど)の勢いであった。

「リヴァイアント(海竜神槍)!!」

正友が銀竜を用いて暴風を起こしたのとほぼ同時に、秀樹も槍(やり)を手にした状態でラグナクレストを旋回(せんかい)させると、激しい豪雨(ごうう)が降り出した。

豪雨と暴風は融(と)け合って雷雲(らいうん)を起こし、正友と秀樹が敵を目指してケルビムを疾走(しっそう)させると、それに呼応(こおう)するかのようによく共に後を追って来た。

「ダブルクロスドラゴニックサンダーストーム [双竜疾風光爆雷鞭振走撃]！！」

正友の言葉の如(ごと)く、銀竜の四方八方を行き来する雷(かみなり)が竜のしなやかな動きに帯同(たいどう)し、まるで巨大な竜の形をした鞭(むち)となり、敵を打ちすえ薙(なぎ)払っては感電(かんでん)させる。

数に物を言わせるかのような氷の一族の群れは、その数が仇(あだ)となって、個々に躲(かわす)わす事がままならず、感電の連鎖(れんさ)になす術(すべ)もなかった。無人の野を駆(か)けるが如(ごと)く敵の群れを薙(なぎ)払いながら滑走(かっそう)する銀竜。しかし、その勢いは急に止まってしまう。

「これはッ!?!…」

雷が急に消え、正友を寒気(さむけ)が襲(おそ)った。何が起こったのか理解できず、敵の中に孤立(こりつ)した正友は思わずそう言った。

「雪か!?!」

秀樹がそう言って、正友の元へ駆(か)けつけた。突然の雷の沈静(ちんせい)と共に、残存(ざんぞん)するビッグフットとスノータイガー達が襲(おそ)いかかって来たので、後ろに乗っている洋一と功一と4人で奮戦(ふんせん)したが、次第に不利な状況に追い込まれてゆく。

「秀さん、何があったんだ？」

「おそらく詩音ちゃんの仕業(しわざ)だ。俺の内力を冷気で相殺(そうさい)したんだ！水を雪に変え、技の元の1つを断つことで俺達が作り出した技を打ち消した…」

「そんな…。」

混戦(こんせん)の中、状況を確認(かくにん)し合う秀樹と正友。パワフルなケルビムの動きをビッグフットが束(たば)になって抑(おさ)え、足場を固められた秀樹達に敵は容赦(ようしゃ)なく大攻勢(だいこうせい)を仕掛けてきた。

「しゃらくせえッ!!」

正友はそう呼びながら、更に大技を繰り出そうとした。

「馬鹿!!そんな大技を連発したら、内力(メキド)が底をつくぞ!?!」

秀樹はそう叫んだが、時すでに遅く。

「九天轟砲大龍無爪劍舞(きゅうてんごうほうたいりゅうむそうけんぶ)！！」

正友の激しい剣技は、それに供(とも)う凄まじき剣圧を生み、空間を歪(ゆが)ませる程の剣撃(けんげき)となってありとあらゆる敵を打ち払った。

「今、行くよ！詩音ちゃん!!」

息を切らしながらそう言う正友。翼(つばさ)を生やし、猛(もう)スピードで詩音めがけて滑走(かつそう)して行こうとしたが...

「させるかッ!!」

詩音の前に立ちはだかる四天王が、正友の行く手を阻(はば)もうとした。

「テメェらに用はねえッ!!」

正友はそう言いながら、四天王の攻撃を軽快(けいかい)かつ巧(たく)みな動きで躲(かわ)し、詩音のすぐそばまで詰め寄った。

「目を覚ませ！詩音ちゃん!!」

切実(せつじつ)な面持(おももち)ちで正友は叫ぶようにそう言ったが...

「...あなたに用はない」

詩音は冷たくそう呟(つぶや)き、茫然(ぼうぜん)とする正友の真横をすり抜けるようにして、はるかかの方へ翔(か)け出した。

「!?...待てよッ！詩音ッ!!」

振り向きながら呼び止めようとした正友だが、剣次達に取り囲まれ身動きが取れない。

「死ねいッ!!」

剣次がそう言いながら正友へ刃を振りかざした。

「邪魔(じゃま)だッ！散れッ!!」

返り討ちにせんと、正友は風切丸(かぜきりまる)で応戦した。今までどんな名刀(めいとう)であろうと粉碎(ふんさい)してきた正友のスピリットアームズ(神統武具)であったが—

「くッ...なんて堅(かた)さだ...!?!」

剣次の剣は全く折れる気配を見せない。ぶつかり合ったお互(たが)いの武器(ぶき)で押しあう二人。少しでも力を緩(ゆる)めれば、斬(き)られてしまうという気が抜けない状態。

「お前、その剣は何だ!?!」

剣次の氷柱(つらら)のように白い剣。おおよそ目にした事のない色彩(しきさい)と、高い強度を持ったその剣の正体は何なのか? 正友はつい頭の中で想った事を口にしてしまい、敵である剣次に質問をしてしまうという失態(しったい)を演じてしまっていた。

しかし一意外にも、剣次はその謎(なぞ)をあっさりと答え出した。

「これはな。永久凍土(えいきゅうとうど)より取り出した氷と、詩音様の内力を掛け合わせる事によって、水晶(すいしょう)のように自ら気を発する鉱物(こうぶつ)となったのを利用して造られた剣よ。」

剣次が自らの武器について種明(たねあ)かしをしたのには目的があった。

剣次の話しを聞きに回っていた正友は、そちらに気が向いてしまい、周りの四天王達への警戒(けいがい)が薄(うす)れてしまっていた。

それが剣次の意図(いと)であり、正友に生じたその隙(すき)を他の四天王達が見逃(みのが)す訳(わけ)もなく。硬直(こうちよく)した正友へ向かい攻撃を仕掛けてきた。

(マズい...!!)

心ではそう思ったが、体が対応しきれないでいる正友。

(殺(や)られる!?)

そんな戦慄(せんりつ)が正友の脳裡(のうり)を支配した。しかし一

「リヴァイアディープインパクト[超高速水竜連撃]!!」

疾走(しっそう)するケルビムの背から飛び立ち、重力と慣性(かんせい)に自らの翼で加速を上乗せした秀樹が、そのスピードをラグナセイバーに込めることにより、正友に群(むら)がる四天王を一瞬(いつしゆん)にして蹴散(けち)らす攻撃力を生み出し、窮地(きゅうち)を救(すく)っていた。

「助かったよ...秀さん!」

「...今のはかなりヤバかったぞ、だから無茶(むちゃ)するなって言ったんだ!...」

ホッとする正友とは対照的(たいしょうてき)に、凄まじい瞬発力(しゅんぱつりょく)を見せた秀樹は、肩で息をしなければイケない程に疲れをのぞかせていた。

「詩音ちゃんは...!?!」

そう言う正友に一

「...今は目の前の敵に集中しろ!」

と、秀樹は忠告(ちゅうこく)した。

「えっ!?!敵って、今、倒したんじゃ...!?!うお...つと!」

先程の秀樹の攻撃で、四天王は壊滅(かいめつ)したと正友は思いこんでいたのだが。彼らはまだ倒れておらず、即座(そくざ)に反撃をしてきた。

油断(ゆだん)していた正友は武内と伍籐に強襲(きょうしゅう)され、躲(かわす)しはしたものの、相当にびっくりした様子であった。

「...こりゃあ～詩音ちゃんと話す前に、コイツら片付けないとダメだな...。」

追い詰められた正友は、ここに来てようやく冷静さを取り戻したようで、そう言って伍籐の攻撃にカウンターで蹴りを合わせた。

「うひょ～...軽いですねえ。」

正友の渾身(こんしん)の蹴りであったが、伍籐は一向に効いていないといったそぶりであった。

「はは一ん...もしかしてその鎧(よろい)も剣と同じ素材で出来てるのか?」

四天王は皆同じ鎧を着こんでいた。それは詩音の内力で造られた剣と同色・同質であり、正友がそう推察(すいさつ)したのも当然の結果であった。

「そうですよ～。これはダイヤモンドよりも堅(かた)く、生命体のように氷のエネルギーをも精製(せいせい)する、伝説の金属“アイスハルコン”です。」

正友と刃を交えながら、伍籐はそう答えた。

「いいのか。そんな秘密(ひみつ)をベラベラと喋(しゃべ)ってよ?」

「この最強の鎧(よろい)と剣に敵(かな)う物なんてありませんからね。」

「フン。後でほえ面(づら)かくなよッ！」

「フフフフ。強がってはいますが、君の内力(メキド)はほとんど残ってませんね〜」

「何イツ!？」

「隠(かく)したって無駄(むだ)ですよ〜。あんな大技を立て続けに出したんですから、無理もないですね〜。」

そう言ってニヤける伍籐。

「あん!？なんだその薄ら笑いは？まるで内力(メキド)が減少したら、オレに余裕(よゆう)で勝てるみたいなツラしやがって!!」

「今の君なら、私一人でも充分(じゅうぶん)なんじゃないですかねえ〜。」

「フザけるよッ!...上等じゃねえか。今からそれが勘違(かんちが)いだったって事を、テメエの体に嫌という程、叩きこんでやるからよッ!!」

いつになく真剣な表情の正友。その態度(たいど)が、彼の怒りの度合いがどれだけの物であるかを物語っていた。

その頃—

「詩音ちゃん。わたしが分からないの？」

「...。」

正友達から遠く離れた氷山のふもとの平野で、はるか詩音は、もうかれこれ数百合(すうひやくごう)も刃を交わしていた。

その間、はるかは必至(ひっし)に詩音に声を掛けていたが。その呼びかけに詩音は全く応えようとせず、容赦(ようしゃ)なくはるかの急所(きゅうしょ)を狙(ねら)って攻撃を執拗(しつよう)に繰(く)り返すばかりであった。

「くッ...」

あまりにも執拗(しつよう)かつ苛烈(かれつ)な攻撃。このままでは、いつか倒されてしまうのは必至(ひっし)だが、沈黙(ちんもく)を守る詩音が、秀樹の言っていた通り誰かに操られてるのだとしたらと考えると、どうにも反撃できず。いかんともしれないジレンマに襲われ、思わず悔(くや)しそうに歯をくいしばるはるか。

たまらず条件(じょうけん)反射的(はんしゃてき)に出した手が、詩音に当たりそうになったのを、何とか止めたが。そこに生まれた隙(すき)を、詩音は容赦(ようしゃ)なく突いてきた。

「きゃあああああ...!!」

詩音は短剣(たんけん)を用(もち)い、隙(すき)の生まれたはるかの胸元へ突き立てようとした。フレアクロスを両方使い、絡(から)めるようにしてなんとか凌(しの)いだが、横腹に蹴(け)りをまともに受けてしまったはるか。

受けたダメージもさることながら、吹っ飛ばされた感触(かんじよく)に思わず絶叫(ぜっきょう)してしまっていた。

「うああうツ...うううう...。」

堅(かた)い氷の壁に叩きつけられると凄絶(せいぜつ)な痛みが全身に走り、悶絶(もんぜつ)するはるか。冷たい瞳をした詩音は、ゆっくりとはるかの倒れ込む場所へ向かってきた。

「バカね...このまま何もしないまま、殺されるつもり？」

はるかの元へ来た詩音がそう呟いた。はるかが詩音と戦う状況になった時、ケルビムと共に避難(ひなん)させられていた沙織はそんな詩音を見て—

「やめてッ!!お願いッ!!」と、叫んだ。

足元に倒れこむ、はるかを見下していた詩音。そこから上空の沙織を見上げると低い声で—

「敵に命乞いをするの？」とだけ言った。

はるかの一大事と思った沙織は、せめて時間稼(かせ)ぎにでもなればと思い、知ってる情報をできる限りの思考力を使って組み合わせ、沙織を説得しようとする姿勢(しせい)を見せた。

「もし、はるかの命を奪(うば)ったら“ソロモン王の秘宝”は手に入らないわよ！」

あわよくば詩音に戦いを止めさせたいと思っている沙織は、時間のない中、精一杯(せいいつぱい)考えた末の言葉を詩音に投げかけようとしたが...

「...そんなモノ必要ないわ。」

と、まだ何も核心を話してない内から、いきなり全否定を詩音にされてしまい、沙織は言葉を詰まらせていた。

「...どうしてッ!？」

はるかの身の危険を何とかしなければと、愕然(がくぜん)としそうな心を立て直し、話しをつなげようとした沙織。詩音の注意をどうにかして引こうとしたが、それはものの数秒程度の時間しかつなぎ止められないでいた。

「言う必要もない...。」

そう言って沙織との対話を断ち、はるかの方を振り返った詩音。だが、沙織のわずかな時間稼(かせ)ぎが功(こう)を奏(そう)し、何とか立ち上がる事ができたはるかであった。が、足をガクガクと震わせ、今にもまた倒れこんでしまいそうであった。

しかし、はるかのそんな姿を見ても、何のためらいもなく詩音はトドメを刺そうと刃を向けてきた。

「アイスフォルシオン[氷絶小太刀]!!」

倒せそうで倒せないはるかを見て、詩音は短刀をもう一本増やした。詩音の小柄(こがら)な体つきは俊敏(しゅんびん)な動きを可能にし、フットワークを使って瞬時(しゅんじ)に懐(ふところ)に飛び込んでくる。その速さと小回りを兼(か)ね備えた動きに、はるかは距離を置こうとしても出来ない。

両手に短刀を持った詩音は、単純に攻撃力が二倍になっただけには収まりきらない“冴(さ)え”を見せた。一気に多彩(たさい)になった攻撃のバリエーション。

それは、体の柔軟(じゅうなん)さと機敏(きびん)さに加え、二刀流となった事により狙(ねら)う急所のポイントが2倍になったというだけでも厄介(やっかい)なのに、その上にドコを狙(ねら)うか分からないのだから、組み合わせだけでも計り知れず。それら複合的要素(ふくごうてきようそ)が混然一体(こんぜんいつたい)となって、はるかを襲ってきた事による物であった。

「...本気を出さないと本当に死ぬよ？」

だんだんと追い込まれるはるかの耳に、微(かす)かにそう言う詩音の声がした。

「ガトリングブラスト[爆炎連弾撃]!!」

凌(しの)ぎ切れないと判断したのを契機(けいき)に、やむを得ず攻勢に転じるはるか。持ちまへの体さばきで、詩音の速い動きを躲(かわ)し、必殺技(ひっさつわざ)を繰(く)り出した。

戦闘意欲(せんとういよく)のないさっきまでとは違い、互(たが)いに五分(ごぶ)の条件での戦いは、パワーで勝るはるかが次第に詩音を圧倒(あつとう)し始めていた。

「...これじゃ、パワーが足りない。」

ボソッと独り言のようにそう言う詩音。冷たいイントネーションは、自分の事なのにまるで他人事でも論(ろん)じているかのような印象をはるかに与えていた。

はるかが詩音への攻勢に転じていた頃。はるかから離れた氷山の一角で戦う、正友と伍籐・武内のペア。その先では、二手に分かれた四天王のリーダー格である剣次と松志田が、秀樹と激闘(げきとう)を繰りひろげていた。

内力がまだ多く残っている秀樹は、終始(しゅうし)優位(ゆうい)に戦っているようであったが。反対に正友は追い込まれて行っているようであった。

「黄流カマイタチ!!」

正友の渾身の一撃も。

「フッフ...それだけかい？」

と、全く利いていない様子で笑い飛ばし、憎(にく)たらしいほどの余裕(よゆう)を見せる伍籐。

「いい加減にしろよッ！コラアアアーツ!!」

正友は相当に激昂(げっこう)しているようで、力まかせに風切丸(かぜきりまる)を伍籐へ振り下ろしたが、楽々とその一撃を防がれてしまっていた。

「軽い軽い。」 と、あざ笑う伍籐。

「これならどうだッ!!」

そこへ渾身(こんしん)の蹴(け)りを浴びせる正友。確かに首の急所を狙ったつもりではあった。しかし、一向にダメージを与えた手応(てごた)えを感じられない事に焦(あせ)る正友。

「いやあ～スピードは速いんですが…。コレも内力不足ですねえ～」

伍籐はそう言って、正友の動きが止まったのをいいコトに掴(つか)みかかろうとしてきた。

「遅えーんだよッ。喰らえッ!!」

その伍籐の攻撃を躲し、背後から死角を突いてきた武内の攻撃をも躲した正友。交錯(こうさく)した武内と伍籐に、すかさず連撃を加えたのだが…

「効かんなあッ!!」

正友の叩きこんだ何発もの突きや蹴りにも、全く動じていない武内と伍籐。正友の攻撃を相当打ち込まれたにも関わらず、二人はのけぞる事さえなく、攻撃の際(さい)に出来た間を見逃す事なく反撃に転じてきた。

攻守(こうしゅ)の切り換えにパニくる正友。それは武内の行動が想定外(そうていがい)だったからで、自分の攻撃がこんなにも効果を示さない事に、焦(あせ)りよりもショックを隠せないといった感じで目を丸くさせた。

武内の攻撃は何とか防いでいたが、相手は一人でないのを必至(ひっし)になるあまりに忘れていたのか、寸前(すんぜん)で背後に殺気(さつき)を感じ。伏兵(ふくへい)のように現れた伍籐の初太刀(しよだち)は回避(かいひ)したものの、その後の強烈(きょうれつ)な蹴(け)りをまともに受け、吹き飛ばされてしまっていた。

「だから、さっき“軽い”って言ったじゃないですか～。」

忠告(ちゆうこく)したにも関わらず、同じ失敗をした正友をそう言ってあざ笑う伍籐。今風の若者のような言葉使いの中に、サディスティックな彼の性格の一面が滲(にじ)み出していた。

「おやおや？アバラが折れちゃいましたかねえ～。」

地べたに這(は)いつくばり悶(もだ)える正友を見て、伍籐は恍惚(こうこつ)の笑(え)みを浮かべながら、更に悦(えつ)に浸(ひた)ろうとして言葉責めをするかのように、うづくまる正友を見下ろしながらそう言った。

「ア…アア…」

苦しそうにしながら何かを喋(しゃべ)ろうとする正友。

「どうしたんですか？息が辛そうですね～。」

苦しそうな正友を見て、ゾクゾクするような快感(かいかん)に身を奮(ふる)わせているように見えながらも、伍籐は更に意地悪(いじわる)な言葉を投げかけたのだが…。

次の瞬間、正友から意外な返事をされ、驚(おどろ)く事となる。

「アホが見一豚のケーツって、テメエに言いたいんだよッ!!」

「何ッ...!?!」

急に正友は元気になり、伍籐を馬鹿にする発言をした。SでもありMでもある伍籐は、びっくりしながらも、自分がなじられた事に心の片隅(かたすみ)ではちょっとした歓(よろこ)びも感じずにはいられなかった。

しかし、そんな感情も、自分が絶対的優位にいるからこそ持っていた余裕からなる物であり、そのゆとりは間もなく終えてしまう事となる。

「なっ...何ですか...これは!?!」

そう言った伍籐は急に三半器官(さんはんきかん)の麻痺(まひ)を覚え、立ってられなくなってしまっていた。

「引っ掛かったな、バーカ！」

そんな伍籐を見て、さっきまでの仕返しと言わんばかりに、あざ笑い返す正友。武内も伍籐の後を追うように、酔(よ)っぱらいみたく千鳥足(ちどりあし)となっていた。

正友は、二人の剣を奪うと、頑強(がんきょう)な鎧(よろい)をそれでメッタ打ちにして壊(こわ)し

「も～お前らラリッちゃっただろうから分かんねえだろうけどよ。一応、お前らがどういういきさつでそうなったのか、冥土(めいど)のみやげに教えてやるよ。オレにとって、“戦い”ってのは人生の檜(ひのき)舞台(ぶたい)。実際、オレの先祖は“舞(ま)い”で龍(りゅう)の怒りを沈めたって言うからな。だから、沢山の観衆(かんしゅう)がいるような気持ちで、オレは戦ってるシーンを演じてるつもりで戦う。要(よう)するに仮想(かそう)の観衆(かんしゅう)の視線を魅了(みりょう)するように戦うって事だ！だから今日お集りの1億と2千人（正友の勝手な妄想(もうそう)のお客様方に分かってもらえるように、ミュージカル風のムーディな語りと演技、お前達をブチのめしてやるから、感謝(かんしゃ)しながらブチのめされるよ！いくぞッ!!」

こうして、ドSな正友のドSな一人舞台が始まった。

「チャラチャッチャッチャラッラー♪...これはムーディ違いでした～♪」

少し向こうで剣次と松志田を相手にしている秀樹は、正友がフザけている声が耳ざわりで戦いにくそうであった。

「話しは本題に戻るけどよッ。お前等はオレの拳(こぶし)で、体の内部を破壊(はかい)されたんだよ！“るろうに剣心”のマンガ読んで猛勉強して、オレ様が極めた究極奥義だ～！！...って、これもウソ。二重の極(きわ)みじゃなくて、内功勁(ないこうけい)と化勁(かけい)を融合(ゆうごう)した神楽龍球拳法(かぐらりゅうきゅうけんぽう)の奥義だ。それがお前達に効くまではちょっと時間がかかるから、ワザとお前らの攻撃をまともに喰らったフリしてただけだよ。まともに喰らったフリして、化勁でダメージを消して、苦しそうにしてたんだよ！どうだ！迫真(はくしん)の演技だっただろ？あとは、内功勁と化勁の応用と融合についてだが。その辺は説明がややこしいから、オレにぶちのめされてから病院のベッドの上で、ゆっくりと自分で考えろッ!!」

一番肝心(かんじん)な所は答えず、どうでもいい箇所(かしよ)を長々と喋(しゃべ)り、そうしながら舞うようにして武内と伍籐の間を行き来し、無防備な二人に攻撃を加える事も欠かさなかった正友。

「トドメだ！讃岐(さぬき)の山ピーこと、オレ、正友様の華麗(かれい)なる芝居(しばい)の登場人物にお前らを入れてやるから、せいぜいイイ芝居をして、オレ様を引き立てながら散れッ!!」

そう言うと、正友の一人芝居が始まった。

～次章へ続く～

バトルボーラーはるか
第三集 氷の美少女
第5章・再会

<http://p.booklog.jp/book/66196>

著者：Ψ(Eternity Flame)英 樹 (はなぶさ いつき)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>

ブログ：<http://profile.ameba.jp/jjmmd123/>

更新・編集：Ψ(Eternity Flame)秋乃空(あきのそら)

ブログ：<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお願い致します。

<http://p.booklog.jp/book/66196>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/66196>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ